

主なる神のみ手の業である被造世界

この詩もまた 103 編に続き、「わたしの魂よ、主をたたえよ」で始まり、35 節で「わたしの魂よ、主をたたえよ。ハレルヤ。」で終わっている。しかし、詩編 104 編は、内容は少し違って、全世界が神の創造されたものであって神を賛美していることを歌っている。日本の精神風土のようなアニミズムの自然観とは違い、多様な存在物を纏める唯一の創造主の認識は多神教の自然的神認識とは異なっている。この詩は 35 節ありそれぞれのヘブライ語原典から釈義するには長いし、その必要もなさそうであるから、それぞれが熟読し全体を味わうことにしたい。

1. 主よ、わたしの神よ、あなたは大きいなる方 (1 節)

世界に存在するそれぞれに神々が宿るといふより、存在するものはそれらを存在させている主なる神の「栄えと輝き(威光)」の「衣」のようなものであるという。

光、天、雲、風(嵐=戦車、雷鳴=伝令)、燃える火などが神の纏われる衣である。創世記 1 章の創造の働きが今もなお続いている。世界と人間を超えた偉大な神への賛美は、日本の比較的穏やかな自然を映す花鳥風月というより新生讚美歌 121、329 のような被造世界が神の威光を纏うというような讚美に属すが、(このような讚美歌が少なく、自然調和的な讚美歌が好まれるのも日本のキリスト教徒のあり様かも知れない。あるいはカール・バルトの「自然神学」批判の悪影響かも知れない) この賛美あるいは創造主への賛美が「わたしの」神よという個人的な形でなされている。にもかかわらず、より大きな信仰共同体がこの賛美に加わるようにまねかれているのであろう。

2. 地の確かさ(5-9 節)

日本的仏教の通念のように「地」は影のようなものではなく、主なる神が確かな基礎の上に、確かなものとして存在している。地は「不動」のシンボルである。「地は、世々限りなく、揺らぐことがない。」外国人は地震の多い日本に滞在し、地震を経験すると驚くそうであるが、まあ、それはその人たちが住んでいる環境によるのであろう。「山」が不動の象徴ということもあるが、ここでは、「大地」がその基礎の上で「世々限りなく」動かされることはないと言われていた。水が山々を上るというイメージは物理学的に理解できないが(山を上る霧か?)、山から生じる水は谷を下り、やがて海に注ぎ、そこで境界線が引かれ、逆流することはないという。だから人には、地震だけでなく、津波も恐ろしいのであろう。

3. 水の恵みと地上の生命 (10-18 節)

水はいのちには不可欠であり、主なる神は雨水の溜まる地下流水をある処で「泉」として湧きあがらせ、獣、鳥、草木のいのちを維持される。だからこそ「旱魃」は恐ろしい。水が豊かで水道の蛇口をひねれば水を得ることのできる日本社会では分かりにくい「水」への言及かもしれない。

4. 月と太陽 (19-23 節)

主なる神は月と太陽、物理学的には太陽と月であるが、月を与え、人は月によって一月(太陰暦)28 日

を決め、時間の計測の尺度とした。また、太陽を与え、日の出から日の入り（実は地球の自転であるが）を半日、あるいは、日の出から次の日の出、日の入りから次の日の入りまでを一日としている。獣は夜に、人は昼に動き回る。被造世界に生きる生き物はこのリズムに従って生きている。夜は寝ること！ 昼は働くこと！ 主なる神は時間の主である。

5. 中間的総括（24 節）

25 節より「海」について歌うが、1 節が挿入され、主なる神はすべてを「知恵」によって造られ、地上には創造されたもの、いのちが満ちている（夥しい！「大地はあなたの豊かさで満ちている」と言う。

6. 海（25-26 節）-30 節（生かされていること）

信仰者の目は陸から海に注がれる。海も大きく豊かであり、魚介類で満ちており、海原を船が行きかう。怪獣「レビヤタン」（リヴァイヤサン）も海の何処かに生息している。怪魚も「戯れている」が面白い表現である。主なる神に飼いならされているのである。これ以下は海の生き物への言及か全生き物への言及か定かではないが、神がそれぞれ「食べ物」を与え、食物連鎖の中でそれぞれが生き、生かし合っている。生きとし生けるものは神の「息吹」（rūha, 29 節）によって生かされ、それ（女性形）が取り去れると死んでしまう。生物は「塵」となる。（この「霊」への言及から教会の伝統はこの詩編をペンテコステに読むように導いている。個体の死はそれで終わりかも知れないが、主はまた息を送って生き物を創造し、地の面を新たにされる。」ここで「アダマー」が用いられ、「創造する」「新しくする」と言われている。

7. 結語部分（31-35 節）

最後の部分は「願い」の部分で、「どうか」「どうか」「どうか」が三回繰り返される。第一は「主の栄光がとこしえに続くように」（yāhî, Kal. Future, 3per. Sing. Hāyā）「どうか」という副詞があるわけではなく、動詞の未来形で shall be である。次も未来形で「喜ぶ」で「Yahweh shall rejoice His works」である。更に、34 節では「どうかわたしの黙想が shall be sweet は「確かなものになる、誓約する、保証する、喜ばしく、甘いものである」を意味するようになる。35 節の「どうか」は「罪ある者」が「消え失せますように」（yittammū, tāmam は、完成する、終わる、止むの未来形）。これらの祈願の中に、「主が地を見渡されれば地は震え/山に触れられれば山は煙を上げる」という文章と、「命ある限り、私は主に向かって歌い/長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう」という「私」の告白文が挿入されている。また、「喜び祝う」（31 節、34 節）が主なる神ご自身がご自分の業を、信仰者の「わたし」が喜び祝うと言われている。あくまでも「Yahweh において」喜び祝うと言う。

そして、「わたしの魂よ、主をほめよ。ハレルヤ」で終わっている。「ハレルヤ」は詩編の 104 編に至って初めて登場する。この詩は神の創造の業を驚き、喜びをもって表現する。